

平成30年6月26日（火曜日）

生涯教育の先駆者

廣池千九郎の業績

— 著作に込めた思い —

②『中津歴史』

足かけ5年を費やす

平成18年に教育基本法が改正され、新たに「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する（中略）態度を養うこと」という文言が入りました。愛国心については様々な意見があります。郷土愛を醸成することに異を唱える人は少ないと思います。私たちは自分の生まれた土地に愛着を持ち、都会に出ても郷愁の念を抱くものです。

では、具体的に郷土愛を育むには、どのような方法があるのでしょうか。廣池千九郎は、それを歴史教育に求めました。古代から明治までの中津の通史を書物にまとめ、それを生徒だけでなく中津の人たちに読んでもらい、郷土に対する愛情を深めてもらうと考えたのです。当時、勤務先の中津高等小学校の校内に移管されていた旧藩校進脩館の蔵書を読みあさり、また旧家や寺社に伝わる古文書

や口碑、伝承

なども東奔西走して調査しました。

そしてこれらの史料を近代の実証的な歴史研究法によって吟味し、足かけ5年の歳月を費やして明治24年12月に『中津歴史』を発行しました。

歴史から育まれるもの

本書では歴史といっても出来事だけではなく、先人がどのようにこの中津を作り上げてきたかという具体的な業績が多く記されています。廣池が意図したのは、次のようなことです。先人たちがこの郷土を苦勞して作り上げてきたおかげで、いま私たちの暮らしがある。その事実を知ること、先人たちへの感謝の念が湧き、自分も地域の一員としてどのような貢献ができるかを考えるきっかけになる。そのような過程で土地の人間としてのアイデンティティが形成され、自然に郷土愛が育まれていく

と考えたのです。

また、本書において歴史研究の根本的な課題は、多角的、実証的な研究によって「複雑極まりない人類の行跡に一定不動の法則があることを示す」こと、と記されています。これは後に、人類の栄枯盛衰に道徳的な因果関係を思いだそうとする、モラロジ（道徳科学）の基本的な問題意識につながるものです。

『中津歴史』は近代日本における地方史研究の先駆的業績といわれ、現在でも評価を得ています。廣池は本書の執筆を機に、歴史研究を通して新生日本に貢献しようという大きな志を立て、26歳の夏、歴史の中心地である京都へ旅立つのです。

（公益財団法人モラロジ研究所廣池千九郎記念館学芸員・矢野篤）



廣池の学者としての原点となった著作『中津歴史』

法学博士・廣池千九郎（1866～1938）は教職の傍ら、明治24年、25歳のときに中津地方に関する歴史書を著します。当時、近代化が急速に進み、日本人のアイデンティティーが大きく揺らいでいました。廣池は、国民に自らの郷土に対する愛情や誇り、さらには日本人であることの自覚を持たせることが、歴史教育の使命と考えました。その思いの中で編んだ『中津歴史』。日本で最初にアーカイブズ（公文書館）の設置を提唱したことで知られる著作についてご紹介します。